

はしていない。それらの言葉にはそれぞれの機能があり、また、その言葉を使わざるを得ない人と場面が存在するからだろう。

ここでは、当該イントネーションが主に「女性」の口調として非難を浴びた社会背景について考察した。これはあくまで推測であり、物的証拠は何もない。簡単に結論の出せる問題だとは考えていない。しかし当該イントネーションに対する非難にも、その他の言葉に関する様々なバッシングと共通の社会現象がある、ということは確かだろう。それは、発言の場が社会に開かれる過程で「新参話者」が発言するようになると、それを嫌い、それを恐れる守旧派層(プレステイジの高いと考えられる言語の話者、いわば既得権益者)の意図せざる様々な圧力が働くこともあるという現象である。当該イントネーション非難は、そのような圧力が、当時台頭しつつあった若い世代、特に女性へと向けられたものとしても捉えることもできるだろう。後を絶たない若い世代へ向けての言葉の非難や最近の新聞紙上(朝日新聞 2001年10月20日、同年12月29日など)で見られる「嫌言権」などという言葉には今後とも注意する必要があるだろう。

2-5. いわゆる「尻上がり」イントネーション現象から「話調」研究へ

本章ではいわゆる「尻上がり」イントネーションの音響的特徴、談話・文法上の機能、文体表示機能、それらに対する社会的な評価あるいはステレオタイプ、そしてその社会背景について述べてきた。当該イントネーションの音響上の特徴は、各種の俗称に反して「上がる」のではなく、小上昇後に大きな下降がある。実際は、発話の文法的、意味的切れ目を示し、まだ続くことを聞き手に教える機能に加え、聞き手の注目を集め、対話への積極参加を促す機能を持つと考えられる。若い層にとっては、場面の改まりの程度にはあまり関係なく、何かを説明する場面で使われる。もはや流行だからという理由で使っているのではない。一方当該イントネーションを使わない層は、当該イントネーションに流行語的側面を見出し、当該イントネーションの使用に異議を申し立てた。実際、当該イントネーションの使用者は「若い女性」に限らず、中高年の男女、若い男性にもいる。当該イントネーションが広がった背景には、日本語の中で改まった場で、何かを説明するようなときの話し方の型が確立していなかったという言語外的事情、及び当該イントネーションが他のイントネーションと区別する上で都合が良かったという言語内的な事情があったと考える。その上、「ネ・サ・ヨ」が禁止され、「アー、エー」なども嫌われたことも、当該イントネーションの積極的採用に拍車をかけたものと考えられる。

ところが、当該イントネーションには、先に述べたような実質的な機能や実際の使用状況とは違った意味付けがなされた時期があり、当該イントネーションを伴う発話は、「甘えた」、「幼

い]印象、流行語的な印象を与えた。また当該イントネーションが非難された 1980 年代は、当該イントネーションの使用者の代表は「若い女性」とみなされた感は否めない。実際の使用状況や音調とも異なる当該イントネーションの名称や評価の背景には、先に見たようなステレオタイプがあったと考えられる。また、様々な言葉に対する非難・バッシングは、むしろその話者を非難し、結果としてその話者の発言自体を否定し、発言の場を制限する効果がある。当該イントネーションが非難された 1980 年代は、女性の社会参加が進み、メディアでの女性の発言の機会が増えた時期でもある。これも当該イントネーションについてのステレオタイプを生んだ時代背景の一側面であろう。

当該イントネーションがある程度の頻度で出現した談話には、それのない談話とは異なったものとして認知されることがわかった。これは、談話ごとの「話調」が実在し、その比較も可能であるということを示すものである。しかし、一方で当該イントネーションが同じように出現していても、つまり音調の形式上は同じ「話調」であっても、話者の性別や年齢(場合によっては話題など)によって聞き手がそれから受ける印象は必ずしも一様ではないということも見てきた。また当該イントネーションの出現する談話の「話調」が年代によって文体的な位置付けが異なることも同時に見てきた。しかし、その背景には、当該イントネーションに対するステレオタイプがあるということが、各種の状況証拠から推察することができた。

以上から言えることは、日本語においては実際「何を言ったか」以前に、「どのように言うか」、「誰が言うか」という問題が、実はいまだに非常に大きな意味を持っているということである。なだ(1974, p.167)は「言葉を、考えを、それを口にした人間と切り離して考えられるようになるためには、自分と相手とを対等と見なすことができなければならない」と述べているが、裏を返せば、自分と相手とを対等と見なせていないがために、「誰が言うか」や「どう言うか」にこだわっているかもしれない。しかし、仮にも「国際化」を標榜する以上、発話者にはどうにもならないような話し方や方言、あるいは外国語を話すときの癖など、言葉の内容以外の特徴に対するいわれのないステレオタイプによる言葉(遣い)バッシングは批判されなければならない。したがって、その際、話者が意識しにくい「話し方」、「口調」などを積極的に扱う「話調」研究が、社会言語学的に重要な意味を持つのである。

「話調」研究は、全体的な韻律的特徴、つまり言葉を運ぶための「道具」、あるいは「乗り物」を研究することである。しかし、「乗り物」そのものの研究に最終目的があるのではなく、そこに載せられたもの(言葉・意味)やその「乗り物」を選択した人や社会的文脈などと「乗り物」自体の相互関係から人間の言語行動そのものを探ることにある。

そのためには、第一に、より客観的に各談話の「話調」を記述することが肝要である。「話調」

が、各談話における各イントネーション型の現れ方や、ポーズ、発話速度など、韻律上の諸特徴から形成される特徴的な型の総体であるとすれば、各要素に関する測定可能な数値によって、ある程度それを客観的に表すことができる。しかし、その前に「話調」形成にとりわけ重要な要素となる句末イントネーションの型に関して客観的な類型化を行う必要がある。第4章でイントネーション以外の韻律的要素も総合して形成される各談話の「話調」の実態を明らかにする前に、次の第3章では句末部の音調、句末イントネーションについて、本研究独自の新しい類型方法も含めて明確に記述しなければならないだろう。これは、第4章で談話種ごとの「話調」の違いを明らかにしていくためにも不可欠の作業である。